

IV 中 島 省 吾 先 生 を 偲 ん で

国際会計研究学会第 2 代会長の中島省吾先生が平成 25 年 12 月 24 日に逝去されました。享年 91 歳でした。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げ、神森智・鎌田信夫・平松一夫・野村健太郎・古賀智敏・石井明の各先生より寄稿された追悼文を掲載することに致します。



中島省吾先生追悼の辞

神森 智（国際会計研究学会第 6 代会長・松山大学）

国際会計研究学会の元会長・顧問および日本会計研究学会の元会長・名誉会員の中島省吾先生がご逝去されたことのお知らせを頂きまして、驚きまた残念な思いを禁じ得ません。聞けば、昨年 12 月 24 日夜の突然のことであったそうです。大正 11 年（1922 年）のお生まれですから享年 91 才です。

ここに、天に召されました先生のご生前の数々のご功績を讃えますとともに、謹んでご冥福をお祈りさせていただきます。

2011 年（平成 23 年）の国際会計研究学会の大会のさいには、国際会計に関するテーマを掲げてご講演をなさるとの案内を頂きまして、先生がお元気で、なお学界及び学会でご活躍なさっていることを知り、大いなる喜びを感じたものですが、この度の訃報に接し、ことのほか人生の無常を感じざるを得ません。私も後期高齢者ゆえ、その時の大会への出席は見合わせたのですが、先生のご講演のレジメでも頂けないものかと思ひ参加費だけを送りましたが、今にして思えば、あの時多少の健康上の不安を冒してでも出席して、先生にお目にかかる機会を作っておけば良かったと後悔しています。

先生は、誰しもお存じの通り、アメリカ会計学会会計原則(基準)の研究・紹介の面で学界に大きな貢献をされました。中でも、今では古典の一つとなったペイトン・リトルトンによる AAA のモノグラフの訳書「会社会計基準序説」は、先生のお名前とともに、不朽のものとして後世に伝えられるでありましょう。

一時期、この「序説」の訳書、これと併せてご著書の『「会社会計基準序説」研究』、また、先生の訳編になる「AAA 会計原則」のお世話になった会計学ゼミナールの学生諸君は日本中にその数知れずと言っても過言ではないものと思っています。

先生がご研究なさったアメリカ会計学会会計原則(基準)は、岩田巖先生が Generally Accepted

Accounting Principles に対する Accounting Principles to be Generally Acceptable であると評され、それまでの帰納的に形成された静態論的会計原則が演繹的に形成される動態論的会計原則(基準)に転換したものであるという点で、会計原則(基準)の性格に画期的な変化をもたらしたものでした。先生は、こうした変化をいち早く感知されていた数少ない研究者であったと思います。先生は昭和 58・59 年度に「企業会計の諸目的と 目的適合性に関する研究」について文部省の科研費をお受けになり、その代表として研究をお纏めになりました。会計基準の演繹的設定方式の浸透を背景にしたご研究でありました。

会計の変化を早くからキャッチされるという点では、国際会計問題についても同じでした。先生が早い時期から国際会計問題にご関心を示され、ご研究をなさっておられたということは、中央経済社創立 30 周年記念事業として企画された「体系近代会计学」シリーズの「国際会計基準」の責任編集者となられたことから伺われるところであります。因みに、このシリーズは、最初は中央経済社創立 10 周年記念事業として始まり、20 周年にも内容を改めて刊行されたもので、「国際会計基準」がこのシリーズの一冊となったのは 30 周年の際のものが始めてでした。余談ではありますが、私は、先生のご署名入りの本書を頂いています。また、前記の『序説』研究もご署名のあるものを頂きまして、ともに私にとって貴重な宝物です。

国際会計問題は、当初は国際比較会計論とでもいうべき内容が考えられていたようですが、先生も参画された IASC が設立されてからは会計基準の国際的統一適用が関心の対象になってきました。上記の先生の責任編集になる「国際会計基準」の出版された頃には、国際会計というと会計基準の国際比較がなお大きな関心事であったことが分かります。同書の最後で、先生ご自身「国際会計基準確立の可能性」と題して一章を執筆されていますが、その内容は当時の情勢をよく反映したものと見ることができるとともに時代の変遷を感じさせるものでもあります。

「序説」についても、また「国際会計基準問題」にしても、先生が、つねに、会計学の新しい動きに敏感に反応されて先を展望しながら研究活動をなさっていたことをひしひしと感じ、また、研究というものはかくあるべしと教えられているようにも感じて敬服の念を禁じえません。「丈夫棺を覆いて事まさに定まる」という辞をかみしめている次第です。

以下は余談になりますが、私が松山商科大学（現松山大学）にいたとき、先生にお願いして「国際会計論」というテーマで集中講義をお願いしたことがありました。たしか昭和 60・61 年頃のことだったと思います。そのとき、日本公認会計士協会による専用のバイнда 2 冊に挟んだ 24 号（特別利害関係の開示）までの英文・和文対照の国際会計基準を頂きましたが、今となっては、私には、前記の宝物とともに先生との思い出をつなぐ貴重な資料となりました。

他に、先生との思い出と言いますと、本稿の初めにふれたように、先生は日本会計研究学会の会長をなさっていましたが、私は先生の会長任期中、同学会の理事を仰せ付かっていました。振り返ってみて、私自身は同学会のためにお役に立ったことはありません。それより、度々ご連絡を頂くなど先生に何かとお手数をおかけしたことが頭の中に残っています。

また、先生はフェリス女学院の院長として学院経営の事実上の責任者でした。同学院は日

本私立大学連盟に加盟しておられ、先生は学院を代表されてこの私大連盟の会議にご出席されていましたが、私の在籍していた学校法人松山大学もこの連盟に加盟してまして、私はアテ職の理事長でしたので、市ヶ谷の私学会館での会議の際にはよくお目にかかる機会を得、またお言葉をかけて頂いたものです。そこにあるレストランにもお誘いを頂いたことがありました。

また、私はかつて、箱根・伊豆方面に、さる団体の役員・家族とバス旅行をしたことがありますが、先生のご住所であった伊東市の吉田辺りを経由して「みかんの花咲く丘」の碑のある道を下って行ったことがありました。あとで先生にお会いしたときその話をしましたら、先生から「寄って下さったらよかったのに」とのお言葉を頂きました。今なお忘れられないお言葉でした。

先生との、二度と叶わぬ様々な思い出が走馬灯の絵のように頭の中を駆け巡っています。住所が離れていますので、それほど度々お会いしたわけではありませんでしたのに。

なお、先生は、どなたもご存じのように経験なクリスチャンですが、先生からお聞きしたことで記憶していることに、先生のお父様は牧師さんとのことでした。先生のご勤務された学校が横浜国大以外はすべてキリスト教系の学校であったことも、先生の人生のすべてがキリスト教との深いつながりの上に成り立っていたことを表すものかと拝察しています。

この度は、中島先生に対する追悼の辞を書く機会を与えて頂きまして光栄至極に存じます。重ねて、謹んで先生のご冥福をお祈り致します。

合掌

中島学説の会計理論構築への貢献

鎌田 信夫（国際会計研究学会第7代会長・南山大学）

中島省吾先生のご帰天の報に接し、謹んで哀悼の意を表するとともに、ここに一文を捧げ、生前のご指導と交誼に感謝します。

先生は、「企業が財務諸表を作成し報告する時、会計理論の規範性がどのような論理に基づいて確立されるか」を探求することに生涯を捧げられました。先生は、このような規範性は、制度的には、法律、慣行という形で強制力を獲得するが、その規範性が理論的な検証に耐えることができなければならないとして、その手掛かりとして Paton, Littleton の『会社会計基準序説』（「序説」）と AAA のステートメントに求められました。

私は、先生がこの「序説」が 1953 年に翻訳出版される前に、まだ学部の学生でしたが、染谷恭次郎先生の研究会で「序説」に取り組んでいました。「序説」は、全くの初心者である私にとって難解で、例えば、第 2 章では、Concepts, Cost Attach, 第 3 章では Cost Aggregate, Bargaining Exchange, Implied Cash Cost などなど、どう訳してよいのか、またその内容はとなると、なおさら分からないことばかりでした。私にとって、先生の訳書がタイムリーに出版され、やっと少しずつ「序説」が分かってきました。また、1970 年に『新版会計基準の

構造—AAA 会計基準の理論構造』を出版されましたが、これで「序説」について多くの解説と解釈を頂き、私は何とか不十分ながらも、「序説」を体系的に理解できました。先生は「序説」と AAA のステートメントに基づき、会計基準の規範性の理論的根拠について検討し、それらの主張の行間の空白を補筆されています。

「序説」は、基礎概念として、企業実体、活動の継続性、測定された対価、原価凝着性、努力と成果、検証力のある客観的な証拠、および諸仮定、の 7 項目をあげています。私の理解によれば、先生は、これらの基礎概念の構成を次のように整理されています。「企業実体」と「事業活動の継続性」は、ともに期間損益計算に直接かかわるといふより、その前提または基盤に関連をもつ全般的な概念であり、期間損益計算に直接関係するのは、「努力と成果」、「原価凝着性」、「測定された対価」である。すなわち、「努力と成果」は、費用・収益対応の基本的な考え方であり、「原価凝着性」は、取得原価を再分類して当期の収益に対応する部分を区分することを示し、そして「測定された対価」は、取得原価を提供した対価で測定することを示す、ということであります。また、「検証力ある客観的な証拠」は、会計の問題と切り離すことができないが、「序説」の第 3 章以下の問題と直接的には結びついていないし、最後の「諸仮定」は、上述の基礎概念の底に何を仮定したかを細かくしたもので、会計理論全体の仮定とは異なる。「序説」が、なぜ基礎概念の構成について言及していないか、疑問を感じますが、先生がこのような基礎概念の関係を整理されたことにより、「序説」の残りの理解が大変容易になりました。

「序説」は、基礎概念を財務諸表の重要性という観点から論述しています。しかし、これを理論の正当性という点からはほとんど論じていません。先生は、理論の正当性は企業会計の技術的要因と社会的要請から生み出され、またこれらは歴史的な性格と社会的性格を持つと指摘されています。企業会計の技術的要因とは、複式簿記がその典型ですが、そのほかに期間計算、原価分類や原価配分という問題も含まれます。社会的要請とは、財務諸表作成者である経営者と出資者や債権者など利用者からの要請であります。経営者からの要請とは経営管理機能に関する要請であり、利用者からの要請とは収益性や支払能力に関する情報の要請であります。「序説」では、利害関係者の収益力に関する要請が著しく強調されています。しかし、先生は「資本主義の様相が変わり、貨幣経済社会機構が改造されるにつれて、これらの要請も変化し、会計の諸基準も基礎概念も再び吟味され、その根底からゆす振られることもある」といわれています。

先生は、「序説」改訂版発行後の 1969 年に、講座現代会計の第 4 巻『対境関係と現代会計』（編著）を出版されました。ちなみに、対境関係とは「企業とそれらの相手方、すなわち利害関係者との関係」ということですが、本書はそれを前提に会計理論を構築しようとするもので、「序説」の 1 つの展開ということができます。

私は、本書の補章 3 で、主要財務諸表の 1 つとしてキャッシュフロー計算書を検討すべきだということを主張しました。その理由として、私は、3 つ指摘しておきました。第 1 は、最近において企業の財務規模が拡大してきたため、経営者はキャッシュフローについて詳細な計画を立て、キャッシュフローを統制する必要が生じたこと、第 2 に、設備投資の増大とと

もに費用合計に減価償却費が占める割合が多くなり、企業の純利益と資金との間に特定の関係が殆ど認められなくなったこと、そして第3に、インフレーションの進行その他の理由から、原価主義会計の合理性が疑わしくなり、客観的かつ適正な損益計算を行うことが困難になってきたことをあげました。これらの状況のもとでは、私はキャッシュフロー計算書が企業の利害関係者にとって必要であると主張しました。キャッシュフロー計算書は、キャッシュフローに基づく営業活動と財務活動の報告書であります。営業活動からのキャッシュフローは客観的事実を示すから、損益計算に含まれる経営者の主観的判断は排除されます。また、キャッシュフロー計算書は損益計算書より比較可能な情報を提供できるという点で、利用者の要請に応えることができます。

私は、「序説」およびAAA会計理論の規範性確立のための努力は、IASBの概念フレームワークの構築に引き継がれ展開されていると思います。

非力ながら、先生が私たちに示して下さった財務会計研究の指針をもとに、できるだけ概念フレームワークの討議に参画して、先生のご指導に応えられるよう努力する所存です。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

わが国最初の真の国際派会計学者、中島省吾先生

平松 一夫（国際会計研究学会第8代会長・関西学院大学）

国際会計研究学会第2代会長・中島省吾先生におかれましては、2013年12月24日に地上の生活に別れを告げられ、享年91才で神様のもとに召されました。

国際会計研究学会は1984年に設立され、染谷恭次郎先生が初代会長を務められました。染谷先生の会長辞任に伴い、翌1985年に関西学院大学が開催校を務めた第2回研究大会で中島先生が会長に選出され、その後、1986年の第3回研究大会（慶応義塾大学）、1987年の第4回研究大会（横浜市立大学）の2年間、会長として学会を導かれました。

1987年は日本の会計界で大規模な国際会議が開催された年として記憶されています。日本公認会計士協会は東京で世界会計士会議を開催しました。一方、学界は日本会計研究学会が中心となり、京都で世界会計教育者会議を開催しました。この国際会議の開催にあたり、これを支援するために世界の会計学者が集って1984年にIAAER（世界会計学会）を設立しています。日本からその初代副会長に就任されたのが中島先生でありました。1984年から88年の4年間、副会長として世界の会計学会のために貢献されたのでありますが、同時にそれが日本での国際会議開催の支えになったのです。

2000年には関西学院大学が担当校を務め、神戸で国際会計研究学会とIAAERの共催で学会を開催しました。このとき、IAAERはそれまで多大の貢献をされた中島先生に対してFounders' Awardを授与しています。

中島先生は日本会計研究学会の会長をも務められました。先生のご貢献の中で特筆すべきと私が思うことの一つにJapanese Accounting Forumがあります。英語により日本会計研究

学会の諸活動を報告するこの画期的な事業を成功させるために、中島先生は1993年から97年に初代の編集長を務められました。後に私が編集長を務めさせていただくことになったとき、印刷経費を節約するため紙ベースの製本を中止しwebに掲載することとしました。中島先生はそれは苦手だとおっしゃいました。そこで中島先生には紙ベースで一部を印刷し、別途お送りすることとし、喜んでいただきました。今となってはいい思い出です。

中島先生には、個人的にもいくつか貴重なお話を聞かせていただく機会がありました。長年にわたりIASC日本代表を務められたご経験についてのお話は興味がつきないものでした。関西学院では102年前に初めて簿記・会計の授業が始められましたが、それを担当したのは木村禎橋先生でした。木村先生は東京高商（一橋大学の前身）の出身で、熱心なクリスチャンでした。中島先生の先輩にあたります。私自身は関西学院にしながら木村先生にお目にかかったことはありません。中島先生からお聞きする木村先生のお話もまた、私には貴重なものでした。中島先生は熱心なクリスチャンとして知られていますが、国立教会の設立には中島先生が献身的な尽力をされたことを告別式で聞いて初めて知りました。学会の開催日が日曜日と重なったときには、牧師に許可をもらってきた・・・などと話しておられたのもいい思い出です。

私が中島先生とご一緒に務めさせていただいた仕事があります。オハイオ州立大学が実施しているAccounting Hall of Fame（会計の殿堂）の指名委員会メンバーです。中島先生の訃報を私は担当のダニエル・ジェンセン教授にメールでお知らせしました。ジェンセン教授はそのメールをしかるべき方々に転送されたようです。そのうちのお一人、ステフェン・ゼフ教授（ライス大学）から私にすぐにお悔やみのメールが届きました。ゼフ教授はその中で次のように述べておられます。

「中島教授のご逝去の報に接し、大変悲しく思います。私は博士課程の院生であった1950年代にAnn Arborで中島教授に初めて会いました。中島教授はペイトン教授に会うために来られたのです。私が1972年と1987年に日本を訪問した時には、私の講演を聴きに来られた学者の方々に対して中島教授が通訳をしてくださいました。2004年には東京で、IASCの歴史に関する書物のために中島教授にインタビューさせていただきました。それは、中島教授が15年間にわたってIASCの日本代表を務められたからです。私の直近の東京訪問は2011年1月～2月でしたが、その時にお目にかかった中島教授は体調が優れない様子でした。中島教授はその時80才後半でしたから、もとより無理のないことです。中島教授は日本の会計学教授の中で最初の真の国際人であり、日本の会計界の重鎮でありました。中島教授は素晴らしい英語を話し、執筆されました。中島教授は偉大な友人でありました。」

日本の会計の国際化に多大の貢献をされた中島省吾先生がお亡くなりになり、私の心にはぽっかり穴が空いたかのようです。しかし、先生の目指されたことは私たち後進が引き継がねばなりません。中島先生が天にあって私たちを見守ってくださることを願っています。

中島先生、これまで本当にありがとうございました。先生が地上での生活を終えられても、先生の魂は私たちの中にいつまでも生きています。中島省吾先生、安らかに眠りください。

中島省吾先生の御逝去を悼む

野村健太郎（国際会計研究学会前会長・愛知工業大学）

国際会計研究学会の会員として、永年に亘り御貢献された中島省吾先生の御逝去に接し心からお悼み申し上げます。

先生は御壮年期において、米国ペイトン、リトルトンの学説に傾倒され、邦訳に御尽力され、また、米国の発生主義認識を中心とする費用収益計算の損益会計に関し、日本において早くから普及教育に指導されました。この思考は、戦後の企業会計原則の基礎思考にもとり入れられ、日本の会計制度の運用にも影響しました。しかし、1990年以降の日本の経済力低下もあり、IAS、IFRSに強調する企業集団次元での企業価値測定を重視する純資産を精緻化する損益計算への要求には、限界があり、企業会計原則の存在意義が低下していった事実は認めざるを得なくなりました。

ただ、原価・実現主義を基調とする費用収益対応の原則を取り入れた純利益の測定は、永年の運用実績もあり、これを軽視することはできず、IFRS時代になっても包括利益算定の過程において、純利益を表示するという思考は、日本では尊重されている。米国も、純利益表示の重要性は維持されている。貸借対照表を初めから重視するEUにおける独、仏等の諸国とは大きく異なっている。しかし、包括利益を最重視する思考はグローバル次元で大きな潮流になっている。

企業集団の会計、つまり連結会計次元での包括利益測定重視への大きなうねりは、少くとも上場会社にとっては最早押し止めることは不可能となってきた。証券市場で資金調達したり、グローバル次元でM&Aを仕掛ける企業にとっては緊要な課題となっている。しかし、「企業益」と「国益」とは異なっており、日本は他の先進諸国とは異なり輸入大国でもあり、エネルギー資源輸入に悩み、一方では新興の海外諸国への生産移転、技術流出が進展し、国力の低下心配、国際収支悪化傾向に結びついてきた。

連結ベースでの企業益も重要であるが、TPP交渉進展も視野に入れると、日本は上記の特性から国益も考慮して経営展開していくことが大切となってきた（この点がシェールガスが豊富に産出することが見込まれてきた米国と異なるところである）。

また、日本の通貨である「円」は、米国の通貨である「ドル」と対比して基軸通貨としての地位を有していない。そのことが外国為替相場の変動に大きく影響されるという不利な状況にある。国際収支の赤字化が懸念される今日において、グローバル次元で、包括利益測定を重視する連結経営展開がこれから一層求められている。

日本の上場会社において、少子高齢化や人口減少に直面していることを考えると、日本国内に付加価値が増加する経営展開が切迫した大きな課題となっている。このような潮目に当たっているときに、中島先生を喪失したことは、当学会にとっても大きな損失といわざるを得ない。もっと学会においても貢献して戴きたかった。しかし、これは今更愚痴にしかすぎず、学会員に残された研究課題となるものである。

先生の遺産として残された御貢献を惜しむとともに、心から御冥福をお祈りし、御生前に御親交下さったことに深く感謝申し上げます。安らかにお眠り下さい。

中島省吾先生を偲ぶ

古賀 智敏（国際会計研究学会会長・同志社大学）

昨年12月24日、中島省吾先生が静かにとわの旅に発たれた。ペイトン＝リトルトンなどアメリカ会計理論および会計基準研究の先駆的研究者として、戦後のわが国会計制度の形成・発展に大きく貢献されるとともに、国際会計研究学会のリーダーとして、国際会計研究・教育の促進・発展に多大なご尽力を賜った。中島先生とは、筆者が本学会第28回大会（2011年9月8日～10日：東京理科大学）で会長に就任以来、理事会や懇親会の場においてとくに親しく接する機会を得た。この大会で先生は「会計学徒として国際会計基準の今後をどう考えるか」と題して記念講演をされ、これまでのご研究を回顧しつつ、国際会計基準の今後のあり方を論じられた。

同講演の中で、まず、先生が「会計基準」との関わりをもたれるようになった背景と経緯について語り初められ、先生の国際会計研究の原点を紹介された。1950年～1951年に米国ペンシルヴェニア大学でRufus Wixon教授のもとで、W. A. Paton, A. C. Littleton, A.A.Aなど1930年代、1940年代の米国の会計基準について学ぶ契機が与えられた。それが、ペイトン＝リトルトン『会社会計基準序説』（1940, 1958）や『A.A.A会計原則』（1956, 1958, 1971）の名訳書となり、また、ご高著『会計基準の理論』（1961）となって、戦後の草創期にあったわが国会計制度と、その後の国際会計基準の発展に大きく寄与されたことは言うまでもない。

国際会計研究者として、中島先生が大きな関心を抱かれた課題の1つに、「制度」としての国際会計基準のあり方とわが国の対応がある。同講演の中でも、国際会計基準と行政的・法的規制に関して、各国の基準セッターや監督機関と国際会計基準との関係に言及されるなど、関心の強さが示されている。これは、1973年6月、国際会計基準委員会（IASC）の設立時には日本代表の一人として参画し、豊富な会計理論と優れた英語力を駆使して活躍されるなど、先生の輝かしいご経験と実績に裏打ちされるものであろう（詳細は、たとえば、座談会「IASCの現況と展望」産業経理1974年2月号、川口順一氏談など参照されたい）。

また、同講演の中で国際会計「基準」の意味に関して、Rulesと「基準」との相違を述べられている。先生は、『会社会計基準序説』（第1章「会計基準の性格」）を引用しつつ、Rulesは統一の基礎を提供するのに対して、基準は背離を必要とし、また、正当化された背離を判定するための計器と見られる。このような統一的な基準からの背離を認める「基準」観は、IASC設立当初の先生の基準に対する将来の展望においても明確に反映されている（前述の座談会「IASCの状況と展望」、同上誌、46頁）。そこでは、今後生まれてくる基準の姿として、「最も広く問題なく受け入れられる基準」と「違いを明らかにすることによって受け入れ得る

基準」, および「国際的な舞台では受け入れがたい基準」の3つを想定され、今後の基準の型として提示されている。国際会計基準が理想版としての基準を目指すとしても、許容し得る代替的基準の存在を認めつつ、各国の会計制度の状況とその規定要因にも強く注目すべきとの示唆である。

中島先生は、最後に「先人に学ぶ—会計学徒の役割」として、W.A.PatonとA.C.Littletonの会計理論から何を学ぶか、後輩の会計学徒に広く訴えられ、本講演の「結び」とされた。その内容を記して再現することは、今となっては不可能である。しかし、筆者なりの解釈から、敢えて言えば、制度としての会計なり会計原則の拠って立つ経済的環境の分析から出発し、わが国の会計環境を直視して、会計理論のあり方なり制度を考えるべきであるということではないだろうか。たとえば、会計原則（会計基準）のあり方について、「会計原則は財務諸表がその社会でその時期に果たしている役割を基礎にして検討されるべきである」（「会計基準論の実益」1962年、53頁）として、会計研究者も、「わが国の会計の環境についてもっと眼を開いてその発展を直視すべきではないか。」（同）と提起される。

このような中島先生の斬新な認識基点は、1970年代以降の国際会計研究論文においても鋭く、かつ、明快に展開されてきた。たとえば、第1に、個別財務諸表に関して、連結会計が任意開示であった1970年代当時、企業集団化現象のもとでの連結財務諸表の重要性をいち早く指摘され（「個別財務諸表と連結財務諸表」1973年）、第2に、各国の会計基準を相互比較する研究分野として「比較会計制度論」を提唱し（「比較会計制度論序説」1976年）、また、第3に、国際会計基準が整備され始めた1970年代において、わが国開示制度が、外国の投資家への開示について不当な評価を受けることがないように対応すべきとの警鐘を鳴らされるなど（「国際会計基準とわが国の会計制度」1978年）、わが国会計制度の国際化に向けた眼はいつも冷静で、先見性に富むものであった。

会計学徒として、最後まで、国際会計基準の今後に大きな関心と期待を寄せ、慈父のような眼差しで本学会の活動を見守ってくださった中島省吾先生のお姿は、もう見られない。いまはただ、先生が残された偉大なご功績と国際会計研究・教育への情熱を偲び、本学会への多大なご貢献に対して感謝申し上げるのみである。心から哀悼の意を表したい。

中島省吾先生の急逝を悼む

石井 明（国際会計研究学会理事・横浜商科大学）

中島省吾先生は、2013年12月24日のクリスマス・イヴの日に心筋梗塞にて急逝された。享年91歳に至るまで、先生は終始、日本会計界を代表する重鎮であり指導者であられた。

中島先生は、戦後のアメリカ会计学あるいは会計基準論の「伝道者」であるとともに敬虔なキリスト教信者であられた。中島先生のご葬儀は2014年1月3日、4日の両日、国立教会で行われた。喪主は奥様と告知されていたが、実際のところ、ご葬儀では長男の光世氏がその立場におられた。ご葬儀は国立教会をあげての組織的な対応であり、宍戸牧師が徹頭徹尾、

厳かに式を進行され、時折、中島先生が愛唱された讃美歌を参列者全員で斉唱した。今日に至るまで、私は教会中に響いた哀惜のこもった歌声が耳の奥に残っている。中島先生は戦前に巣鴨教会で受洗され、また戦後すぐに国立教会の長老としてその復興に尽力されたことから、国立教会あげての式になったようである。このような組織的活動が、人格者であられる中島先生の基底にあることを追悼の日に私は明確に察するに至ったのであった。

中島省吾先生は、1922年5月に東京市でお生まれになっている。先生は東京商科大学に進学するも、学徒出陣にて戦時中の1943年12月に、海軍主計少尉として九州鹿屋航空隊に勤務された。終戦後、復学して1947年9月に東京商科大学を卒業され、直ちに明治学院専門学校の専任講師に就任。戦後の新学制発足後、1950年4月に明治学院大学専任講師となり、この年の8月にペンシルヴェニア大学ウォートン校に留学された。1年後、同校より経営学修士(M.B.A.)の学位を取得され、1951年11月に帰国、明治学院大学に復職された。ウォートン校では、高名なW.A.ペイトン教授の弟子であったウィクソン教授に師事して、会計学、特にペイトンとリットルトンの共著『会社会計基準序説』の研究に注力された。中島先生は帰国後直ちに、雑誌『会計』に「ペイトン・リットルトンの原価基準をめぐって」(1952年)を寄稿されている。また1953年には『産業経理』に、『会社会計基準序説』と原価計算』という論文を公表しており、以降この2誌のほか、『企業会計』、『商事法務』に約40年にわたって論文や随想を約300本ご執筆されており、会計関係誌における執筆者の常連のひとりでもあられた。中島先生の比類なき健筆ぶりは、アメリカ留学後の30歳を少し超えた頃から始まっており、上述したように帰国後直ぐに『会計』等の会計専門誌に、黒澤清、木村和三郎、上野道輔、山榘忠恕、江村稔などの当時の会計学の大御所の論文のなかに入って堂々と示されたものであった。そして、アメリカ動態論あるいは会計基準論の第一人者としての中島先生の地位は、訳書『会社会計基準序説』を嚆矢として、1956年の中島訳編『A・A・A会計原則論』、さらには会計研究学会での討論(例えば、日本会計研究学会第14回大会での円卓会議「会計理論と会計実践」における会計理論の規範性についての立論等を含む)、さらに1961年には『会計基準の理論—A・A・A会計基準の理論構造—』の公刊等により揺るぎのないものとなっていったと思われる。因みに、名訳書、会計学徒の必読書といわれた『会社会計基準序説』の初版は帰国後の1953年に発刊された後、1958年には改訳版が発刊され、今日に至るまで会計専門書としては桁違いの発行部数を誇ると仄聞している。またその後、先生は1970年の6月より、『会計』誌上、講座「[Paton & Littleton] 会社会計基準序説研究」という表題で、1971年12月まで計17回にわたり連載を行っており、啓蒙的な観点からアメリカ動態論の正確な解釈あるいは取得原価主義会計を分かりやすく解説されている。その集約版『会社会計基準序説』研究』は1979年にご出版された。

中島先生のご経歴について、ここで時間軸を戻させて頂くが、1954年4月、先生は明治学院大学の助教授に昇格された後、その翌年4月には当時、黒澤清、沼田嘉穂、山邊六郎の3教授の陣容を誇った横浜国立大学経済学部の助教授に移籍され自らの研究をさらに深められ、また黒澤教授と1年交代で「経営学」と「会計学」の講義を交互に担当されることになった。横浜国立大学には助教授として9年間奉職されたが、先生はその間の1959年にフルブライト研究

員としてコロンビア大学に第二回目の在米研究（横浜国立大学は1年間休職）を敢行されている。そして、先生は国際基督教大学（ICU）からの強い要請もあって横浜国立大学を退官され、1964年4月に同学の経営関係の教授に就任された。ICUに奉職された時代では、1971年5月に一橋大学より商学博士を授与され、また1973年6月には国際会計基準委員会（IASC）への日本代表にも就かされている（1988年6月まで）。ICUでは財務会計論のほか、財務論や管理会計論などの講義を1984年8月までの約20年間もたれ、のちに同学の名誉教授にもなられた。またICUでは教養学部社会科学科長、大学院行政学研究科長、また学長事務取扱などを歴任された。学園紛争時には、学長事務取扱の立場で中島先生はICUの過激派を含む学生と全面的に対峙し議論を行い円滑に紛争の終息をはかられた。ICU退職後の1984年9月には、先生はフェリス女学院の学院長、そして1989年10月には理事長に選任され、学校経営の職務にも携わられた。同時代の1985年、中島先生は国際会計研究学会の第2代会長、また1988年9月には会計研究学会の会長に選出された（1991年9月まで）。なお、フェリス女学院の理事長の職については2005年に辞された。中島先生が在籍された大学や組織における先生に対する学生、教員、事務職員、理事等からの親愛の念、さらには日本公認会計士協会からの信任は厚い。

国際会計基準への深い関与や影響力、および会計学者の国際的な交流の功労者のひとりとして、中島先生は昭和の戦後期から近年に至るまで、世界的なレベルで特筆されるご功績を挙げられた。第1に中島先生は、上述したように、1973年6月のIASCの創設時より1988年6月までの15年間の長期にわたり、IASCの理事会、起草委員会に日本代表のひとりとして常に基準設定の審議に出席しておられる。この過程では、棚卸資産、連結財務諸表、外貨換算等に関する様々な基準の起草委員会の委員や委員長を歴任されている。第2に中島先生は、1984年には、世界規模での会計学会人の公的な組織として国際会計学会（IAAER）の創設に尽力された。先生は初代の副会長に就任され、藤田先生に引継がれるまでの5年間、その発展に寄与された。第3に、中島先生（IAAER副会長）と染谷先生（国際会計研究学会の初代会長、組織委員会委員長）の傑出した指導力により、1987年10月、日本会計研究学会およびIAAERが中心となって日本初の会計国際会議、第6回国際会計教育会議（ICAE）が京都で開催され運営された。中島先生は、組織委員会副委員長ならびにプログラム委員会委員長として中心的な働きをなされ、日本会計界のプレゼンスを著しく高められた。

さらに、国際会計に連なる先生の大きな貢献のひとつとして『会計』誌上に連載された、3000字の制限を有する「国際会計随想」を私はあえて加えたい。このエッセイは最初読んだ際には気づかないが、それらを連続して読むと、中島先生の先見性、ウィット、文章表現力が遺憾なく発揮されたある種の啓蒙文であることが分かる。中島先生は黒澤先生から雑誌『会計』の「会計随想」の紙幅を1987年3月から託され、それ以降1993年4月まで延べ74回の約6年間にわたり、「国際会計随想」を執筆された。バトンタッチを受けた時、中島先生は65歳でありフェリス女学院学院長の職におられた。この紙幅で中島先生は、日本の会計界を代表しての国際交流、IAAERの創設、IASCの基準設定等に係る興味深いエピソード、あるいは特定の課題に関する意見を自由闊達に語られた。また先生は文化の相違や主要国の会計実務の現状を語られ、また国際会計基準の展望などについての見解も披瀝され、平易な説

明のなかに本質をつく議論も展開された。この随想を読むことにより、我々後学は、折々の国際会計実務や会計界の動向や課題を知り、さらに国際会計基準の必要性、連結や換算会計の要諦を自然に理解しうる。これは、執筆者の語学力、海外経験、会計実務の現状や会計理論の体系的な理解が前提となる。1980年代から1990年代にかけて、このような執筆を的確に遂行しえたのは、上記の資質は無論のこと、中島先生が就中、人間的魅力を有した公正無私の人であり、また日本をこよなく愛していたことにあったと私は愚考する。

実のところ、私は晩年の中島先生と1999年、会計研究学会の全国大会で面識を得て、その後、今日まで折々に交流を重ねさせてもらう中、先生が卓越した会計学者であり日本や世界の会計界を牽引してこられた、ある意味辣腕の指導者のひとりであるという認識に加えて、先生の培ってこられた能力やお人柄が、どのような時代背景、環境、思想、経験あるいは自己規律によって形成されたのかということも私の関心事となった。その発端は、K. カムファーマンとS. ゼフの共著『財務報告とグローバル資本市場—IASCの歴史、1973-2000—』（原典）を通読し私が中島先生に電話にて本書の出版をお知らせした2006年であった。中島先生は、その時ゼフとの面談や過去の交流のことをお話された。そして、『GMとともに』『カーネギー自伝』等の著名な伝記を想定しながら、私は、経営者ではなく研究者、そして米国ではなく日本における戦後の国際的な色彩を有した、日本人のための示唆的な自伝の執筆を、ご高齢とは承知しながらも、2011年に中島先生にお願いした。そして、種々のお力添えや努力を精一杯なすことを私は申し出た。しかしながら、中島先生の近時の環境がそれを許さぬまま、キリスト教と縁の深いクリスマス・イヴの日に、突如として先生は天に召され黄泉の国の人となってしまわれた。

中島省吾先生の生涯をかけた日本の会計界、さらには世界の会計界に対する比肩のないご功績に対して、私は茲に改めて敬意を表し、あわせて先生のご冥福を心よりお祈りする次第である。